

7:42 そこで、神は彼らに背を向け、彼らが天の万象に仕えるに任せられました。預言者たちの書に書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ。あなたがたは荒野にいた四十年の間に、いけにえとささげ物を、わたしのところに携えて来たことがあったか。

7:43 あなたがたは、モレクの幕屋と神ライパンの星を担いでいた。それらは、あなたがたが拝むために造った像ではないか。わたしはあなたがたを、バビロンのかなたへ捕らえ移す。』

<説教>

ステパノは自分たちの先祖たち、イスラエルの民がかつて、千数百年も前に犯した「大きな罪」についてイスラエルの民たちの前で語ります。その罪とは、彼らがモーセに従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく思って、金の子牛を造り、その偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造った物を楽しんで、ということでした(7:39-41)。モーセは、神がシナイ山で彼に現れた御使いの手によってイスラエルの民の指導者、解放者として立て、遣わした人でした。また、シナイ山で彼に語った御使いやイスラエルの民とともに荒野の集会(エクレーシア)にいて、民に与えるための神の生きたことばを神から授かった人でした。イスラエルの民に与えるために神から生きたみことばを授けられたモーセは神に忠実に民に神の生きたみことばを語り教え、与えました。ですから、モーセ自身が言っていたように、イスラエルの民がモーセに従うことを好まずモーセを退けたことは、彼らが神に従うことを好まず神を退けたと同じことでした。そして今やあのときから千数百年経って、イスラエルの民は、先祖たちがモーセに従わず、退け、逆らったのと同じように、神がお遣わしになったキリスト、イエスに従わず、イエスを退け、イエスに逆らいました。そのように「あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたがたもそうしているのです。…今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。あなたがたは御使いたちを通して律法を受けたのに、それを守らなかったのです。」と、ステパノはイエスを信じない同胞イスラエルの民の罪、即ち神への反逆、裏切りを厳しく指摘することになります(7:51-53)。つまり、イスラエルの民の偶像礼拝、神への反逆は今に始まったことではなく、神からみことば、律法を与えられたはるか昔からそうだったのだとステパノは言うのです。

本日見る、ステパノの説教で、彼は、モーセを通して与えられた神の生きたみことばに従うことを好まず、神を退け、エジプトをなつかしく思い、律法を守らず子牛の偶像を造り、その象にいけにえを献げ、自分たちの手で造った物を楽しんでいた反逆者イスラエルの民に対する神の大きな怒りと刑罰を語っています。〈そこで、神は彼らに背を向け〉られたと言います(42)。もちろんそれは民の方から先に神を退け、心の中でエジプトに向きを変えたからです。民のこの偶像礼拝についてモーセがどれほど大きな怒りを示したか、そしてそれは神の大きな怒りに倣ったものだったということは、先主日に触れました。〈彼らに背を向けた〉神はモーセに言われました。「わたしはこの民を見た。これは実に、うなじを固くする民だ。今は、わたしに任せよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がり、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とする。」(出

エジプト 32:9-10)。それに対してモーセが必死のとりなしをして、神は思い直されましたが、しかし民のうちの約三千人が倒れたのでした（出エジプト 32 章）。神を信じ、神に聞き従い、神を礼拝する本当の仕方について神が語りお教えになったみことばに真っ向から反逆する大きな罪が行われたのだと言うのが神の怒り、モーセの怒りでした。少しの考え方の違いであり、致命的なことではない、不安を取り去ろうという人間の自然な感情から出たことだからおおめに見てあげてもいいのではないかなどと言えることではなかったのです。自分のために偶像を造ってはならない、いかなる形をも造ってはならない、それらを拜んではならない、それらに仕えてはならないと生きたみことばではっきりと命じられ、禁じられたことだったからです。

それに続けて〈彼らが天の万象に仕えるに任せられました〉と言うのもまた神の厳しい刑罰でした。それは結局その後もイスラエルの民がずっと偶像礼拝に傾き続けたからです。〈楽しんでいました〉(41)とステパノは言います。確かに偶像礼拝はある意味「楽しい」ものでしょう。なぜならそれは人間の自然で自分勝手な願望にかなったもの、「御利益」を与えてくれるものだからです。〈天の万象〉を拝み仕えることもエジプトなど異教の国々では普通に行われていたことでした。しかしそれも偶像礼拝として神から禁じられたこととしてモーセが民に教えたことでした（申命記 4:15-19）。ということは、それがイスラエルの民にとっての誘惑として既にあったということであり、また、だからこそ神はその誘惑と戦うように前もって警告してくださっていたのです。にもかかわらず、出エジプトから六百年以上もたった預言者アモスの時代にもイスラエルの民の間で依然として偶像礼拝が行われていました。本日の 42-43 節は、アモス書 5:25-27（ギリシア語訳旧約聖書（七十人訳））の引用です。旧約本文の〈シクテ〉も〈キユン〉も土星の神であり、七十人訳の〈ライパン〉はエジプトの土星神の名でした。ステパノがここで強調したことは、イスラエルの民がその楽しみ、御利益を知っていまい、その思想と行動の中に染みこんでいた「偶像礼拝根性」でした。なるほど彼らは外見はモーセの律法どおりの〈いけにえとささげ物〉を神に献げていました。しかし、彼らが子牛を造ったとき以来持つようになった偶像礼拝根性の故にもはや完全なものではありませんでした。いやはっきり言って、ほとんど偶像礼拝でした。アモスの時代にはもう常にそうでした。そのとき迫っていたのは北王国イスラエルのアッシリア捕囚（B.C.720 頃）でしたので〈ダマスコのかなたへ〉とアモスは言いましたが、ステパノはその後の南ユダ王国のバビロン捕囚（B.C.585 年頃）のことも当然知っていたからでしょうか、〈バビロンのかなたへ〉と言い換えました。要するにステパノが言いたかったことは、〈荒野にいた四十年〉のモーセの時代にも、紀元前 8 世紀のアモスの時代にも、そして紀元前 6 世紀の時代にも、イスラエルの民は同じ一つの罪を犯し続け、神を怒らせ、自ら神のさばきを招いていたということです。その罪とは、神と神の生けるみことばを語った預言者たちに従うことを好まず、彼らを退け、自分たちの考え願いを預言者たちのことばつまり神のみこころよりも優先し、預言者たちが語る神のみことばを聞いてそれに従うよりも自分たちの手で造った偶像を楽しみ喜び、自分勝手な神礼拝をするという罪でした。

ステパノは、更にはそのときイスラエルの民がローマ帝国の支配下にあるのも、先祖と同じ偶像礼拝の罪を犯して悔い改めずにいるからだ、だから今こそ悔い改めてイエスをキリストと信じるように、と聞いている人々に勧めたかったに違いありません。なぜなら、

イエスだけが神のみこころにかなった、神ご自身が備えてくださった完全な〈いけにえとささげ物〉として十字架で血を流してご自分を神に献げてくださったからです。そのイエス・キリストを信じ、偶像礼拝者に対する神のあわれみを受けて、神に感謝する者だけが、見かけだけではなく、自分自身を〈神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物〉として神に献げるまことの礼拝者になることができるからです。私たちは神のみことばによって、そのように命じられ、また約束されているのです。